

編 集 に あ た っ て

一般に、あらゆる学問研究の前提として、研究のための問題意識（関心）と分析方法は、常に欠くことができない。換言すれば、それは、なぜその研究課題をとりあげるか、またいかなるやり方でそれに取り組むかということである。

前者のみが先行すれば、その結果は問題提起のみで論証不十分ということになり、また後者のみが重視されれば、その結果は手続きのみが独走して研究目的が不明確になるおそれがある。つまり、問題意識から分析方法が引き出され、両者は一体で不可分の関係にあるべきである。

しかし、学問研究の世界では、予じめ、できあがった研究方法があり、それを適用する下請けのようなかたちで研究成果がまとめられるのではなく、研究の進行過程で試行錯誤を経ながら、研究方法が研究者の意識下の星雲状態から、しだいかたちを整えてくることが多い。しかもそこでの研究方法は、仮説として提示される場合も、しばしばあり、そうである限り、それは後続の研究によって、終始、批判・否定そして書きなおされる運命にあるといえよう。

いうまでもなく、都市研究方法論の対象は<都市学>である。有史以来、この世に都市が登場してから、それぞれの時代にそれぞれの都市学が現われ、関心を集めてきた。そして、20世紀のこの<都市爆発>の時代にも、さまざまな衣装をこらした都市研究の方法や都市論が、論議されている。

しかも人口1000万の巨大都市といえば、いわば、化け物のような存在であり、個々の研究者が、独力で立ちむかえる相手ではない。ここに関連諸科学の諸分野にわたる学際的共同研究の体制を組む必要があり、新たな都市学の確立にむけて、都市研究方法論がどうあるべきかという課題が問われているように思われる。

本号に収録された諸論文も、そうした意図をもって執筆されたものである。ここでは、社会地球化学・環境科学の分野から都市の物質循環のシステムを解明しようとする問題意識があり、そのために学際的共同研究が組まれてきた。また共同研究の効果をより高めるために、いかなる要因を考慮すべきか、それらの論点を整理した論稿も掲載した（なお災害・身障者問題に関する諸調査も同時に収録した）。いずれも、十分な問題提起になり得る論文であることを確信している。

都市研究センター所属の各研究プロジェクト・チームは、これまでも多彩な成果を蓄積してきている。そのような状況のなかで、都市研究方法論プロジェクトの果すべき役割りは、いわば、進行している<列車>にいつそう加速度をつける<機関車>のようなものであろうということである。しかも、各プロジェクトの研究員だけでなく、誰もが交替で一度は機関車に乗りこみ、<運転手>となって運転していただきたいということも筆者は願っている。

石 塚 裕 道